

検証 反原子力の潮流を斬る

林 勉

エネルギー問題に発言する会 代表幹事

エネルギー・環境問題から原子力に対する期待が世界的に高まっており、原子力カルネックスという言葉が当然のこととして語られるようになってきている。この情勢を踏まえて世界の原子力業界も、東芝、WH、日立GE、三菱、アレバという三大勢力に再編された。わが国の三大メーカーが顔を揃えていることにはわけがある。わが国ではこれまで、少しずつでも新規プラントの建設が継続的に行われ、製造技術の温存が図れたことで現在では日本の技術なくしては世界の原子力はないという状況になっているから。今後の数十年間に世界で建設されると予想される数百基の原子力発電所の受注合戦が繰り広げられるという、数年前までは予想すらできなかった活況を呈するようになった。

一方わが国では、原子力立国計画で総合的原子力政策を展開して、関係者は懸命な努力を続けているが、国民的なコンセンサスを得ることは容易ではなく、前途多難である。特に最近の六ヶ所再処理施設に対する反対運動として、坂本龍一氏の「ロッカシヨ」という本やテレビ朝日の「報道ステーション」での六ヶ所反対運動は目にあまるものがある。根拠のない危険・不安を大言壮語して、大衆を巻き込んだ反対運動を展開している。

根拠のない危険・不安を扇動 著名人は責任のある言動を

これだけではない。原子力政策として死命を制するほどに重要な「高レベル放射性廃棄物の処理処分」問題では、高知県東洋町の田嶋前町長が町長時代に導入に向けての第一ステップである文献調査に応募したことで、町を二分する大騒ぎになった。反原子力グループのなりふり構わぬ煽動作戦とそれに悪乗りするメディアでめちやくちやにされ、田嶋前町長は出直し町長選に敗れるという事態になった。

これら反原子力運動の内容を検証し、国の最重要政策の一つである原子力政策についてこのままでよいのか問題提起をしたい。

坂本龍一著「ロッカシヨ」批判

坂本龍一氏は著名な音楽家で、若者を中心として絶大な人気を博している。環境問題にも熱心である。その彼が六ヶ所再処理施設について、いかにも真実を語っているような語り口で読者に訴えているのがこの本だ。彼の主張の幾つかを本書か

ら引用してみよう。六ヶ所再処理施設での放射能について彼は次のように言っている。

「グリーンピースのサイトかな。『一日で通常の原発の一年分の放射能』という情報を見てしまっ、大きなショックを受けました」

これを見た人はこれだけの放射能が六ヶ所周辺に撒き散らされると思いい込んでしまふ。実際は嚴重に管理されていて、国の安全審査により、放射能の放出による周辺住民の年間被ばく線量は〇・〇二二ミシーベル

ト以下に定められている。この値は自然放射線による日本人の年間平均被ばく線量の一〇〇分の一以下なのである。事実この本を読んだ読者の感想文を見ると、「核燃料再処理工場とは、使用済み燃料を再処理してプルトニウムを取り出す工場です。その工場が、一日で通常の原発の一年分の放射能を垂れ流すんだけど、それをほとんどの人が知らないってのが、恐ろしい」(プログ、桃色茶時間)となってしまう。誤解に基づいた熱狂的な反原発フィーバーはこうして作られていく。この誤解、曲解によるプロバガンダが六ヶ所運動の原点になっている。

「地球全体で森林が減っているのは、人類総体が滅びつつあることへの予兆だと思えます。原発のある場所も、もともとは森林を伐採して作られたわけだしね」(坂本)

原発の敷地は森林を切り開いて作った耕作地や都市等に比較して全く無視できるほどに少ないのに、あたかも森林減少の犯人のように言っている。物事を針小棒大に表現する彼の特質が良く現れている点である。その他様々な観点から反対の理由を述べているが、いずれも根拠のない誇大表現に満ちている。これらにより、洗脳された人達が世論の一

部を形成していくということは、恐ろしいことである。

テレビ朝日「報道ステーション」批判

四月一日に放映された「六ヶ所再処理施設、安全性と必要性を問う」は全くひどい内容であり、多くの識者のひんしゆくを買っている。その内容の幾つかを列記してみる。

「再処理工場から排出される放射能は一日で全原発から排出される放射能の一年分に当たる」（テレビ朝日）、これは坂本龍一氏の「ロツカシヨ」から引用したものと思われるが、前述した通り、反六ヶ所運動の常套キヤッチフレーズをそのまま流用しているに過ぎない。

「高レベル廃棄物ガラス固化体から放射性物質が漏洩した場合、一〇秒とたたないうちに周辺にいる人間は死んでしまう」（テレビ朝日）、ガラス固化体は強固に固化されており、液体や気体のように簡単には流出しないし、保管中は厳重な管理下におかれて、周辺住民に影響するような漏洩は起こりえない。また処分は何重ものバリアを設けた地層の安定した数百メートルの地下に埋設することで、周辺住民に被害を及ぼすことのないように周到な対策が計画されて

いる。このようなことを説明せず、やたらに不安をおおる内容だ。その他にもひどい偏見や事実誤認で溢れている。

あまりにもひどい内容であるので、事業者である日本原燃は、テレビ朝日に厳重な抗議を申し入れた。この中で具体的に六項目を挙げ、その誤りと正しい実態を指摘している。さらに再処理施設の警備フェンスや警備カメラなど今後の警備に必要な支障を与える恐れのある施設をはじめ、同社敷地内、特に周辺防護

事実誤認、無断撮影に抗議 無記名で誹謗中傷のブログ

区域内を何の断りもなく撮影し、映像が放映されたことにに対し厳しいクレームを行っている。これに対し、テレビ朝日の君和田正夫社長は事実関係の一部誤りを認め、訂正放送することも検討していることを明らかにした。ささやかな訂正放送をしたとしても、後の祭りである。

東洋町に見る反原子力運動の すさまじさ

東洋町で何が起こったかについては田嶋前町長著の「小さな町の原子

力戦争」（ワック出版）に詳しく書かれている。この中から反対派の実態の幾つかを紹介する。

「町内の各種団体向けの勉強会に、案内状を出してもいない、町外のサーファーたちが参加するようになってから、反対運動は過熱していきました」（田嶋）、そして次のようなおどろおどろしいキヤッチフレーズが住民達にばらまかれたのです。「地球歴史上最大規模の核暴走事故が起る可能性」、「原発は原爆と同じ、原子力産業は金儲けの戦場、

財閥がすすめる人類滅亡産業」、「世界中の原子力産業の推進には金とウソと秘密がまかり通る」、そして「東洋町自然を愛する会」も「核のゴミはいらん、クリーンな町、東洋町を守る」のスローガンを叫ぶようになる。「反対派は無記名なのを良いことに、私の誹謗中傷をインターネットのブログや掲示板に書き込みます」（田嶋）。これには反論も阻止も出来ないという。このようにして、静かだった東洋町は外部から押し寄せた反対派に煽動され、混乱

の中での出直し町長選挙で田嶋氏は敗れたのである。

まとめ

反原子力グループは世界的な原子力の見直し機運に危機感を感じ、より先鋭的な反原子力運動を展開してきているようだ。根拠のない危険・不安を言い募る彼らの行動は言論の自由のもとで許されるのである。坂本龍一氏は「STOP ROCK KASHO ブログエクト」を立ち上げ、音楽家や芸術家、政治家などにもその活動の輪を広げている。政治家では自民党の河野太郎衆議院議員が、偏見や誇張した表現に満ち溢れた反原発の論理を展開している。このような無責任な発言は政治家として許されるのか、自民党に問いたい。テレビ朝日の再処理施設の撮影と放映はテロ等の対策上厳しい規制をかけるべきではないか。反原子力運動のこのような動きを野放しにして、国の重要なエネルギー政策は良いのか、大きな危惧を抱いている。

検証 反原子力の潮流を斬る